

## 儲 叶明 (チヨ ヨウメイ)

中国出身

筑波大学 人文社会科学研究所 博士課程

2016年3月26日より渡日し、今年の3月をもって五年が経ちました。4月より6年目に入ります。異国で5年間を過ごすことを長く感じる留学生も少なくないでしょうが、来日してから一度もホームシックを覚えたことがない筆者にとって、あっという間でした。博士論文を執筆している近頃は、思わずあれこれを振り返ります。

来日してはじめての拠点は名古屋だったので、飛行機が中部国際空港に着陸した時、最初は一匹狼の覚悟で留学生活を送っていくつもりで、のちに、友人に囲まれて楽しい日々を送ることは想像もしませんでした。修士課程の2年間では、一日三食のなか、朝食以外はほぼ友人に囲まれて食べていたので、留学の寂しさをほぼ味わわずに極めて充実した日々を過ごしていました。渡日する前に、中国の日系企業で4年間勤務したこともあり、日本での暮らしや大学院の研究生活には、最初の1-2ヶ月は不慣れがあったものの、適応するのにそれほど苦労しませんでした。しかし、それでも、実際に日本で暮らしてみなければわからなかったことがたくさんあります。

母国と異なる国に訪れた際に、なんとなく「違う」と感じるのはなぜだろう考えると、最初はやはりその国(社会)のインフラに対するイメージが影響しているからでしょう。その次に、行政インフラ、さらに当地の人との交流をはじめ、話を深めると、やがて思想、風習など内面的なものに気づき、場合によってカルチャ

ーショックを経験してしまうことも少なくないでしょう。わたしの場合も例外なくその順番でした。

日本に対する最初の印象は、商店の看板も、電車の車内も、エスカレーターの幅も、文字のサイズも、密にできているけど、何もかもが秩序正しく、かつ(中国のそれに比べて)一回り小さく見えたことです。バスに乗る時は、降りたい駅に到着する前に、最初は運転手さんに促されてもどうすればいいのか分からず、「え? ボタン?? どこだ?」と車内の乗客に注目されながら慌てて探していたことを覚えています。郵便ボックスは赤ではなく緑色で、ATMにはお札だけではなくコインも入れる。住民票などの手続きは警察署ではなく、市役所で行われ、電車の駅内に入るなり「ブーン・ポーン」の音が鳴る(のちに「誘導用電子チャイム」だと分かった)。交通信号が赤から青に変わり、渡り始めると「ピヨピヨ」の音がするし、場合によってボタンを押さないと信号が変わらない。体調が優れていないときはいきなり総合病院に駆けつけるのではなく、ドラッグストアや家の近くにあるクリニックに行くのが普通である。いざクリニックに行くと、迎えてくれたのが看護師と医師一名ずつという二人体制を見て、最初は「大丈夫か」と懐疑的でした。飲食店で最初に出されたのは熱いお茶ではなく氷入りのお冷である。食品から高級ブランド品まで揃っているドン・キホーテやビックカメラなどにも目新しさを感じました。住居について

は、(中国では不安定な印象が強い) 賃貸で暮らしていてもそれほど不安はないし、5-8畳(10-12平米)の部屋は標準サイズで、比較的広いマンションでも部屋の広さはそれほど変わらない。週末は家族で郊外までドライブし、イチゴ狩りか、ファミリーレストランで一家団欒する。ほぼ全員釣り、ゴルフ、撮影、登山、生け花、競馬など、何かしらの趣味を持っている。新年もわいわい盛り上がり、熱いお料理ではなく、事前に用意した冷たいお料理を(中心に)食べて静かに過ごす。休日は昼下りの午後、自宅の庭でお花と庭木の手入れする、地上とBS、CSは何か難しいことではなくリモコンのボタンとして理解してよい。クリーニング屋さんではシャツの料金だけがほかのものより安い。お祭りの屋台の定番として、焼きそば、バナナチョコ、鮎の塩焼きなどが挙げられる.....

以上は、おそらく日本人にとっていづれもごく普通の日常ですが、私にしてみればいづれも来日するまで疎いものでした。日本での5年間の生活を通して、学位の取得、研究生活、研究者としての在り方など、一見もっと大事な経験も積んではいましたが、個人的には、このようなどうしようもない「日常」こそが、かけがえのない体験であると考えています。なぜなら、日常的経験を通して身につけた身体的、情緒的感覚こそ、やがて生き方を形成し、社会や文化的思考につながっていくと私が思っているからです。「文化」というと、一見とてつもなく壮大なトピックですが、よく考えてみれば、夏という何となく花火を連想する、お祭りという何となくバナナチョコを思い浮かべる、新年というとお雑煮の味が蘇る、電車の駅でいう

と「ビーンポーン」の音を思い出す... 実はこの程度の話に留まっても良からうかと思いません。むしろ、文化的共感や連帯を覚えるためには、この程度の話に留めなければ、という側面すらあると思います。「これぞ我々のやり方だ」と説明するほど、相手には共有できないこととなってしまう、返って情動的に働かない。「日本の新年はこんな感じなんだよ」、「夏の風物詩は花火大会だよ」、「お祭りの定番料理の一つとしてチョコバナナがあるんだよ」と説明しても、おそらく聞き手としては何のぬくもりも感じられないでしょう。むしろ、何かの拍子でお互いに目を合わせてクスッと笑ってしまうのがちょうど良い塩梅ではないでしょうか。

一方で、よりマクロな視点で見ると、日本は、夏に台風、冬に積雪、一年中地震に備えつつ、時々津波にも対応しなければなりません。このような危機感と不安に対処しつつ、日本は同時に、春に桜、夏に蝉の鳴き声、秋に紅葉、冬に雪という四季がはっきり分かれている美しい国でもあります。身の周りの景色の移り変わりや空気のおいさを感じながら、季節限定商品などを楽しんで、四季の風物詩とお祭りを追いかけて、静かに、おだやかに歳月をかさねていく感覚、都会の繁雑さのなかでもちよろちよろ流れるせせらぎと長閑に鳴らす鹿威しをもとめる感覚には、日本に来るまで共感できませんでした。このように、決して穏やかな自然環境に恵まれているとは言えないものの、日本人は、それとの共存を試みながら暮らしているとしていきます。このようにして、異文化の感覚を覚え、またそこから自国の文化を「再帰的に」見直せるところが、留学で得られた経験の醍醐味と言えるでしょう。

そのような経験を獲得したのも、まさに博士課程2年生の頃より、坂口国際育英奨学財団にお世話になったお陰です。当時は、平日はつくばにいながらも、週末は非常勤の勤務でほとんどの場合は東京に通っていましたが、財団の豊富多彩な活動は、まさに当時の東京生活を構成する不可欠な一部でした。振り返ってみると、2019年では、歌舞伎教室、富士山の秋季一泊研修会、指定文化財を所蔵する東洋文庫の見学、日赤チャリティコンサートの鑑賞などと、数多くの年中行事を経験させていただき、2020年はコロナ禍による多難な状況の中にもかかわらず、オンライン研修会での貴重なコミュニケーションの機会をいただきました。とくに2019年の現地参加の活動は、いずれも個人ではなかなか行く機会のないものでしたので、どれも印象深く、素晴らしい思い出になっています。そのなか、歌舞伎教室では、日本の伝統芸術である歌舞伎を身近に鑑賞し、その背後に、歌舞伎俳優と舞台のスタッフの努力と工夫を切実に感じました。秋季一泊研修会では、富士山の雄大さと忍野八海の美しさに魅了されながら、ほかの奨学生のご発表、審査員の先生方々のご意見を聞けてとても勉強になりました。また、大学を出て以来の一泊遠足でもあったので、朝のラジオ体操も含めて、とても楽しんでいました。また、指定文化財が多数所蔵されている東洋文庫では、葛飾北斎の作品や生立ちの解説を聞きながら見学でき、江戸時代の日常の濃縮として過去の日本と何かしらの対話ができたとような気分でした。日赤チャリティコンサートでは、はじめてクラシック音楽会を体験したので、演奏の迫力と美しさにはもちろん、劇場のなかで「相応しいオーディエンス」

にするためにはどうすればよいかも初めて「見習い」できて、拍手の長さも印象的でした。そのなか、特に歌舞伎、能の他、徳島の阿波踊りなど、日本の伝統芸能の特徴の一つとして、ゆっくり・しっとりした動きは、つよい・激しい・たくましい動きに馴染んだ中国人の目線(例えば京劇、獅子舞など)から見て、実はすぐには共感できるものではないというのが正直なところです。しかし、劇場で、儀式感のある雰囲気にも囲まれながら実際に体験してみると、やがて「日本的審美」を五感で覚えたことがもう一つの収穫と言えるでしょう。なお、活動そのものだけではなく、各活動のために選定して下さった場所も、国立劇場、帝国ホテルグループのレストランパティオ、東洋文庫、サントリーホール、いずれも長い歳月をへた定評のある場所だったので、それもまた独特な体験として楽しませていただきました。そのなか、30年の歴史を持つサントリーホールは古典と現代を持ち合わせた佇まいで、個人的には大好きです。このような多彩な活動を決して潤沢と言えない予算のなかで用意して下さったこと、創意工夫を凝らして色々と考えてくださっていることに心より感謝しております。コミュニケーション面において、財団の伝統として守られてきたハガキも、2020年に果敢にメールに切り替えたのは、時代の変遷とともに変化を鋭意に取り入れる工夫を感じました。

また、これまでの留学生活を通して、筆者自身が有権者ではないものの、日常で街頭演説、議員、市長選挙などの活動を見聞きすることで、一市民、国民として政治への活発的な参与の在り方についても考えさせてもらいました。国と政府が目下直面している困難や課題が、メディ

アを通して国民に開示し、報道の透明性が確保されているところが印象深かったです。一方で、敢えていうのであれば、スピードと柔軟性が、これからの日本社会に問われる課題なのではないかと思っています。「スピード」ということばは、日本社会においてどちらかといえばマイナス的に捉えられがちなので、「品質」の対立項として定着したイデオロギーですらあります。しかし、目下のワクチン接種のデータ記録問題のように、データを歴史資料として保存するのではなく、いかに即時に「活用する」ことを意識し、工夫することが今・ここで日本社会が解決せざるを得ない課題であり、今後長い間の方向性でもあるでしょう。従来の品質重視の考え方を継承しつつ、いかにスピードを持っていくかは、まさに新時代における「和」の思考が求められているでしょう。

継承といえば、ついこの間、坂口財団の17年記念誌「17年の軌跡、そして未来へ」、ずいぶん前からいただいた冊子を拝読させていただきました。冊子の表紙をめくって1ページ目にふっと出てきたのが、奨学生たちに囲まれて、紫がかったストライプ柄のニットを着用されている美代子さんが、奨学生の話に耳を傾けながら、それとなく視線を遠くへ伸ばしていた姿でした。なかには、1988年～2004年の17年間、歴代の奨学生と財団のメンバーの写真が掲載されていました。坂口国際育英奨学財団の設立は昭和63年、ちょうど私が生まれる1年前ということもあり、勝手ながら、それらの写真を思わず自分自身の幼少期の記憶と照合しながら拝見しました。前世紀の80年代末、90年代、そして今世紀に入った初期では、日本のバブル崩壊、韓国の民主化の実現、ソウルオリンピック、

中国の改革開放政策、民主化運動、香港返還、アメリカの同時多発テロ事件など、数多くの歴史に残る出来事が起こりました。そして第三次産業革命に入り、インターネットの普及により、国境に関係なく世の中の価値観も激変していました。そのような時代の流れのなかで、財団としてのありかた、位置づけを、美代子さんをはじめ財団の皆様が追及されつづけてきたと思います。そして現在、美代子さんの抱負と意志を、蜂谷さんと、冊子の写真ではまだ幼かった金田さんによって受け継がれていることを見て、途中で入らせて頂いた身としても感動を覚えております。

わたしは大学時代に日本語を専攻していました。当時の作文のなかでよく書いていたフレーズの一つは、「将来、日中の架け橋になりたい」という一言でした。恥ずかしながら、そのような大義は、自分のような人間でどうせ果たせるわけがないだろうと思いながら、当初決まり文句として無心で書いていました。あれからまた13年の歳月が経ち、ちょうど去年より筑波大学で指導教員の全学英語授業のTAを担当し始めました。日本人の学生さんのプレゼンに対してコメントを書いたり、英会話の練習相手をしたりするなかで、時々ふいに大学時代の自分を思い出します。一瞬、時代の移り変わりを感じたほか、形は異なるものの、もしかして、これでも一種の「継承」ではないかと、ふっと気が付きました。目下、博士論文の執筆に専念しておりますが、近い将来の就職活動では、日本の大学で教鞭を取ることを目指して頑張っていきたいと思います。なお、日中の対照語用論、文化論の研究者としても、日中両国の母語話者が普段気づかない日常の断片を取り上げ

ることで、文化的規範を発見していければと思  
っています。

13年前のあの無心の決まり文句が、本当に  
実現できるかもしれません。

2021年2月